

『左利き』の旅路

—レスコフ・ノート—

—

ロシア語に「蚤に蹄鉄をうつ」ということわざふうの言い回しがある。「精密な技術と能力と創意を發揮して何かとくに手の込んだものを作り上げる」という意味の言葉だが、これはニコライ・レスコフの短篇小説『左利き(トウラーのやぶにらみの左利きと鋼鉄の蚤の物語)』(以下『左利き』と略記)をもとに生れた表現だとされている。⁽¹⁾ロシア皇帝がドン・コサック隊長ブライトフ將軍をとらなつてヨーロッパ諸国を巡り、イギリスに滞在しているおりに、イギリス人はネジを巻くとダンスを踊る鋼鉄製の蚤を作つてロシア皇帝に贈つたが、のちにト

岩 浅 武 久

ウラーの鉄砲鍛冶である左利きなど三人の職人はそれに蹄鉄をうつというさらに精巧な細工をほどこした。左利きは特使とともにイギリスへ派遣され、その鋼鉄の蚤を送り届けた。——という小説の筋から生れたのがこの言い回しだとされ、今ではこの表現は作家レスコフの名とともに広まり、『左利き』はレスコフの代表作のひとつとして広く認められている。しかし『左利き』は、発表当初から現在の栄光の座をかちえていたわけではなかった。レスコフの生存中について言えば、『左利き』は、一八八一年十月の週刊紙『ルーシ』⁽²⁾に最初に発表されて以来、翌一八八二年には『オリョール報知』紙に掲載⁽³⁾、そして一八八二年と一八九四年にはペテルブルグで単行本の

『左利き』が出版され、レスコフの最初の著作集にも第二卷(一八八九年)に『左利き』はおさめられている。しかし『左利き』は批評界ではさほど大きな反響を呼ばず、晩年のレスコフの作品に関心をほらっていたレフ・トルストイも、レスコフについての最初のモノグラフィを發表したヴォリンスキイも、『左利き』には言及していない。レスコフ文学の評価を高めるうえで大きな役割を果たしたゴリキイのレスコフ論においても、『左利き』については触れられてはいなかったのである。

二〇世紀にはいって『左利き』は、革命直前の一九一六年に出版されたあと、一九一八年、一九二六年という具合に出版されていったが、この小説が批評界の枠をこえて広く関心を集めるようになったのは、小説の舞台化がそのきっかけになっている。一九二五年には演出家兼俳優のチーキイが新しい第二モスクワ芸術座で、それまでの第一スタジオの伝統となっていたリアリズムの殻をうち破るべく、『ハムレット』につぐ二番目の出し物として、レスコフの『左利き』を脚色した芝居『蚤』を上演した。この脚本を担当したのが小説家のザミャーチン、舞台装置の担当が画家のクストーヂェフであり、「愉快

な見世物」としてのこの意欲的な舞台は批評界に賛否両論を巻き起こした。モスクワでの上演経験を生かして、一九二七年には、レニングラードのポリシヨイ・ドラマ劇場で、上演意図をさらに明確にした『蚤』(モナーエフ演出)の公演がおこなわれた。脚本と舞台装置は第二モスクワ芸術座公演と同じくそれぞれザミャーチンとクストーヂェフが担当したが、いずれもモスクワ公演のあとで手が加えられて内容を一新している。ザミャーチンは、レニングラードでの『蚤』の公演に際して発行された文集『蚤』のなかで「民衆演劇」の性格を前面に押し出し、この公演はロシヤの「縁日」の行事となった。「ナロードノエ・グリャーニエ」の見世物小屋と同様の性格をもつものだと述べている。さらにこの文集には文芸学者エイヘンバウムが「文学的民衆主義」の一文を寄せ、社会運動の民衆主義とは別個の、古代歌謡、民話、ブイリーナ、宗教詩、ことわざ、民衆詩、年代記など、ジュコーフスキイ、プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフ等の創作に生かされた民衆文学の流れに「文学的民衆主義」という名称を与えている。エイヘンバウムは『左利き』の作者レスコフを、とくにその流れを明瞭に受けつ

いだ作家として位置づけ、その小説形式と言語の独自性を高く評価している。⁽¹¹⁾『左利き』に対する一般的な関心と評価が高まったのは、おそらくこの一九二〇年代のふたつの『蚤』公演以後と言うべきだろう。その後『左利き』は、イヴァーノヴォ、ベルミ、イルクーツク、ハリコフ、オリョール、ブスコフなど、各地の劇場で上演され、現在モスクワでおそらくもっとも実験的な舞台を作り上げているスペシフツェフ劇場でも、ザミャーチンの伝統を受けついで「グリヤーニエ公演」と銘うった『左利き』が上演されている。アンニンスキイはこの演目を最高の出来と評し、「レスコフを通してロシアの深層の感覚がある。痛みと信頼、のどかな休日と透明な苦しみ、生命力とわれらの寄るべなきが……」と述べている。⁽¹²⁾『左利き』の出版部数は急増して、一九一八年から現在までに出版された『左利き』の総部数はおよそ八百万部にも達している。レスコフの小説にふさわしい、こうした『左利き』の数奇な運命を横目に見ながら、われわれはもうひとつの『左利き』の旅路をたどることができ

二

レスコフの『左利き』が最初に発表されたのは一八八一年の『ルーシ』紙上(49、50、51号に連載)であった。この初出時には小説の題名は『トゥーラのやぶにらみの左利きと鋼鉄の蚤の物語(職場伝説)』となっていたほか、小説への注釈として、現在の『左利き』には見られないつぎの一文が付けられていた。

「鋼鉄の蚤についての伝説の最初の兆しがいったいどこで生れたのか、つまりトゥーラのイジマで生れたのか、それともセストロレツクなのかということにはわからない。だがおそらくそのいずれかの土地から生じたものだろう。いずれにせよ、鋼鉄の蚤の物語はもっぱら鉄砲鍛冶の伝説であり、わが国の鉄砲作り職人たちの誇りをあらわしている。そこではわが国の職人とイギリスの職人との戦いが描かれているが、その戦いでこちら側は勝利をおさめ、イギリスの職人たちにすっかり恥をかかせてその鼻柱をくじいた。ここではまたクリミヤの敗戦のある秘密の原因が明らかに

されている。私はこの伝説を、トゥーラの出身でいまだアレクサンドル一世帝の治世にセストラ河地方に移り住んだ老人の鉄砲鍛冶から聞いた話により、セストロレーツクでこれを書きとめた。語り手は二年前にはまだ力が満ちあふれ、記憶も確かだった。彼は熱心に昔を思い出し、ニコライ・パーヴロヴィチ帝を大いに敬い、『古い信仰』に生きて聖なる書物を読み、カナリヤを育てていた。人びとは敬意をもって彼に接していた。⁽¹³⁾」

作者によるこの注釈は、一八八二年に出版された最初の単行本では前がきとして残されていたが、一八八九年のレスコフ著作集第二巻では作者の手でこれが削除され、その伝統が今日まで受けつがれている。しかしこの前がき削除の背景にはいかなる事情があったのか。それを明らかにするためには、もう一度小説が発表された一八八〇年代へと時をさかのぼらねばならない。

一八八一年十月二十六日といえば、『左利き』が『ルーシ』紙上に連載されている最中のことだが、レスコフは『ルーシ』の発行人アクサーコフにあてた手紙のなか

で、『蚤』はここでは文学者たちにさえとても注目されました⁽¹⁴⁾と書いている。これが誰を指しているのかは明らかではないが、『左利き』は初出時に新聞雑誌でとり上げられて論評されることはなかった。この小説が批評界で話題になったのは、翌一八八二年四月にスヴォーリンがこの単行本を出版してからのことである。一八八二年版では、表現をさらに豊かにするためのいくつかの加筆がおこなわれている。⁽¹⁵⁾

最初にあらわれた『左利き』の書評は、『新時代』紙の書評だった。『新時代』紙の発行人は『左利き』を出版したスヴォーリンであり、この書評は『左利き』の広告を兼ねたものなのだが、書評者は小説の前がきをそのままに受取り、鋼鉄の蚤についての伝説が実在し、それを作者が利用したのだということを当然の前提として話を進めている。書評者は、ロシア人の技術がイギリス人の技術にまさっているというこの「伝説」の素晴らしさを指摘しつつ、その一方では作者レスコフの視点に光を当て、トゥーラの天才的な職人である左利きが、イギリスから帰国したあと、ロシアでは取るに足らない存在として扱われ、最後には貧民病院の片すみで頭を割られて

死んでいくという結末は、つまりは左利きにとって異國の方がよかったということになり、あまりにペシミズムの色が濃すぎはしないかとの危惧を表明している。

この書評から十日あとの六月八日には『声』紙が『左利き』の書評を掲載した。書評者はレスコフの前がきを受けて、「これはトゥーラとセストロレーツクの鉄砲鍛冶たちの古い伝説であり、それをわが国の労働者の言葉によって再話したものだ」と説明している。『声』紙は作品中の言葉が偽造語であると主張したほか、「イギリス製の蚤がわが国の職人の努力の結果、跳びはねるのをやめた」などのエピソードが民間伝承だというのはきわめて疑わしいと指摘し、「言葉は歪められ、凝りすぎており、ロシア人は外国人に優っているという類いの話だが、物語そのものは面白い」と述べている。⁽¹⁶⁾

レスコフはこれらの書評を読んだあと、六月十一日の『新時代』紙に『ロシアの左利きについて(文学的釈明)』の一文を寄せている。レスコフは、『新時代』と『声』の書評がいずれも、『左利き』の物語がまるで、「古い周知の伝説」であるかのように主張している点に注目し、つぎのように書いた。

「……『トゥーラの左利きと鋼鉄の蚤の物語』のなかで純粹に民衆的なのは、「イギリス人は鋼鉄で蚤を作ったが、わがトゥーラ人たちはこれに蹄鉄をうち、それを送り返した」という冗談あるいはひと口話が増えてである。『蚤について』はそれ以上何も無く、物語全体の主人公であり、ロシアの民衆の代弁者である『左利き』については、いかなる民間伝承の物語も無い。したがって私は、誰かが彼について『以前に聞いた』などということは有り得ないと考える。なぜなら、正直に言って、私はこの物語のすべてを去年の五月に作り上げたのであり、左利きは私が考え出した人物なのである。トゥーラ人たちが蹄鉄をうったイギリス製の蚤について言えば、これはまったく伝説などではなく、ちょうど「ドイツ人が考えだした」「ドイツの猿」が(いつも跳びはねて)すわらずにいたが、モスクワの毛皮商人がそれに尻尾をつけて、やっとすわった、という話のような、短い冗談あるいはひと口語である。この猿と蚤の話には、同じ理念、同じ調子があり、そこでは、あらゆる精巧な外国製品を改良してしまう

自己の能力に対する穏やかな皮肉にくらべて、自慢の要素ははるかに少ない。⁽¹⁷⁾……」

レスコフ自身の「文学的釈明」が発表されたあと、『左利き』は同時代の雑誌の書評でどのように取り上げられたであろうか。首都ベルブルグの雑誌に掲載された三つの例を見てみよう。まず最初は『事業』誌の書評（一八八二年六月号）である。『事業』誌は、かつてピーサレフの論文「ロシア文学諸庭園の散歩」（一八六五）を掲載してレスコフの長篇『行きづまり』を酷評した雑誌『ロシアの言葉』の廃刊のあと、事実上これを継続する形で発行された雑誌だが、『左利き』に関してはこちらかと言えば好意的に扱っている。『事業』誌の書評は、かつてのレスコフ（当時の筆名はステブニツキイ）の文学を引き合いに出しながら、レスコフがそうした説教者の態度を離れて語り手の立場に専念しているところに作品の成功の一因を見ているが、『左利き』におけるレスコフの役割は、「すぐれた速記者」に限定して考えられている。書評者はそのうえでいくつかの不自然な言葉を指摘し、それらは作者による虚構が感じられる弱点だと

述べている。⁽¹⁸⁾

当時サルティコーフリシチエドリーンやミハイロフスキイ等が編集を担当していた『祖国雑誌』誌の書評（一八八二年六月号）はレスコフに対する反感をむき出しにして、『左利き』の作風についても、時代の風潮に巧みに合わせたレスコフの変り身の速さの結果として、これをとらえている。物語の筋を追って、ひと通りのあらすじは説明されているのだが、結論として述べられるのは、「多分彼（レスコフ）は、まだリベラルなエデンの園を追放されていなかった頃を思いだして、時にはリベラルなダンスを踊るのが好きなのだ。このリベラリズムはとくに不快である」ということであり、結局は軽い皮肉でこれを片づけている。⁽¹⁹⁾

スタシュレーヴィチの発行する『ヨーロッパ報知』誌も、一八八二年七月号に『左利き』の書評を掲載している。これは書評というよりは新刊紹介といった感じの、裏表紙に印刷された小さな記事だが、『左利き』をレスコフによる再話と見たうえで、『左利き』のなかに、ロシア民話の寓意の二重性を見出し、「この物語は、西欧文明を必要としないわが民族の超自然的な能力というア

クサーコフ理論を支持する使命をもつようでありながら、一方では、この理論そのものへの意地悪的的確な諷刺を内に含んでいる」と結論づけている⁽²⁰⁾。

以上三つの書評を見ると、「無署名で書かれている」、「作品のなかに数多くある不自然な言葉づかいをレスコフの失敗と見なししている」、「小説の前がきを文字通りに理解して、作品をレスコフによる伝説の再話と考えた」という点で三者が共通していることがわかる。これら三つの書評のほか、キエフで発行されていた『基盤』誌も、一八八二年七月号に『左利き』の書評を掲載している。『基盤』の書評者は、すでにレスコフの「文学的釈明」を読んでおり、前がきに書かれたような伝説が存在しないことを語りつつ、小説のあらすじを説明したうえで、左利きに加えられた残酷な仕打ちを描写するレスコフの筆にはある種のシニズムがあり、読後にいやな印象が残ると述べている。また作品中の言葉の不自然な要素に対しては、先の三つの書評と同様に否定的であり、それが愚かで低俗であることを主張している⁽²¹⁾。

レスコフが『左利き』に対するこれらの書評をどう受止めたのか、そのひとつひとつをたどることはできない

が、『左利き』が何の伝説にもとづくものでもないという主張に関して言えば、その後もつよくこだわり続けたようだ。レスコフは「文学的釈明」のあと、一八八五年の『処女地』誌に発表された『いにしえの精神病者たち』⁽²²⁾でこの主張を繰り返したほか、一八八九年の『新時代』紙に掲載された『ヘロデの牢獄について(編集部への手紙)』でもそのことに触れている⁽²³⁾。そしてレスコフは、一八八九年のスヴォーリン版レスコフ著作集第二巻に『左利き』を収録するにあたって、さまざまな誤解を生んだ前がきをついに削除した。しかし『左利き』をめぐる問題は、作者の「文学的釈明」と前がきの削除で解決したわけではなかった。同時代の新聞雑誌の書評と、それらに対する作者の反応のあと、『左利き』の旅は作者の死後に持ちこされ、新たな展開を見せるのである。

三

『左利き』の前がきの影響は、レスコフの死後もしばらく残り続けていた。レスコフが世を去った一八九五年にシュリヤーブキンは「レスコフ伝に寄せて」という論文を書き、作家の生涯を振り返っている。シュリヤーブ

キンはそのなかで、『左利き』が書かれたときのエピソードにも触れて、『トゥーラの左利きについての物語』は、N・S・(レスコフ)が一八七八年の夏を過ごしたセストロレーツクの武器工場の一労働者の話からとられた⁽²⁵⁾と書いている。しかしこれは、作家の息子アンドレイ・レスコフの証言と照らし合わせてみても事実ではない。

それから十年後の一九〇五年にトゥーラ武器工場のズイビン大佐が「トゥーラのやぶにらみの左利きと鋼鉄の蚤についての伝説の起源⁽²⁶⁾」という論文を発表した。ズイビンはレスコフの「文学的釈明」を読んでいない様子で、小説の前がきをそのままに受取って、レスコフの小説をフォークロアの記録と見なしている。小説のなかの自然な言葉づかいについては「残念ながら、伝説の擬った言葉や多くの個所にふりまかれた安っぽい語呂合わせは、その価値をいくぶん減じている。伝説のこの側面は、民衆の機知によるものである以上に、さまざまの言葉づかいを好んだレスコフ自身によるものである可能性が大きい⁽²⁷⁾」と述べて、これをあくまで伝説のテキストへのレスコフの介入と見ているのである。そこでズイビンは、伝

説の作者たちが本来知っているはずのない、たとえばロンドンについての比較的正確な情報をどこから入手したのか、という方向で推理を進め、十八世紀のトゥーラ武器工場の歴史のひとつコマに光を当てている。ズイビンの見出した事実は以下のとうりである。

一七八五年のこと、アレクセイ・スルニンとアンドレイ・レオンチエフというトゥーラの二人の鉄砲鍛冶が、イギリスの武器製造技術を学ぶため、皇帝政府の命によりイギリスへ派遣された。二人は異境での幾多の困難に耐え、一七八七年に、パーミンガムとシェフィールドを訪れたあとロンドンへ向かった。レオンチエフはその後ふしだらな生活に身をゆだねて親方のもとを去り、やがて異国で行方不明になったが、スルニンはロシアのために成果をあげるべく懸命に努力し、その善良で正直で礼儀正しい態度により、ノック親方の友情をかちえた。親方はスルニンに対しては何ごととも隠さず、あらゆる援助を惜しまなかったという。ロンドン駐在ロシア全権公使のヴォロンツォーフ伯爵は兄にあてた手紙(一七九〇年七月九日付)のなかでスルニンについて「……彼を失う危険性は大きいにあります。彼はここで結婚し、こ

の国に定住するかも知れません。ここでは彼の持つ能力の故に、英貨二百ポンド以上の年俸を支払うかも知れません……」と述べている。しかしヴォロンツォーフの心配は杞憂に終り、スルニーンは一七九二年に無事故郷のトゥーラに帰って、その後「鉄砲関係全事業監督官」に任ぜられ、その豊富な知識と経験を生かして、トゥーラの武器製造業の改善に尽力した。ズイピンは、このスルニーンがトゥーラの住人たちに伝説の要素となるイギリスの話を変えたのであり、左利きという人物は、愛国者のスルニーンと遊び人のレオンチェフの結合から作りだされた人物だという仮説をたてている。

ヴィクトル・シクロフスキイは、おそらくこのズイピンの説をふまえて、一九四七年の『灯』誌でふたたびこの「職場伝説」を取り上げている。⁽²⁹⁾シクロフスキイは、ズイピンとちがってすでにレスコフによる『左利き』の前がきの削除とその「文学的釈明」を承知しており、作家の息子アンドレイがレスコフ選集(一九四五)に書いた「注」を読んでいるのだが、そのうえで、アンドレイの解説を検討し、「レスコフは一八八一年五月に伝説を書いたのだが、その三年前には幾人かの人に伝説につい

てたずね回っていた」ことを確認する。「レスコフが何らかのフォークロアの基盤あるいは何かの噂を知っていたことはきわめて明白だ」⁽³⁰⁾と述べて、スルニーンをめぐる資料を再検討するのである。スルニーンとレオンチェフの渡英に関してはズイピン説を繰り返しているが、シクロフスキイはここで、スルニーンが単に銃器製造技術の習得にとめただけではなく、外交的役割をも果たしたことを指摘している。エカテリーナ二世の治世にロシアが黒海へ進出したとき、一部のイギリス人がこれに敵対的な態度を取った。一七九一年に事態は極度に悪化し、戦争勃発の危険が生じたが、そのときヴォロンツォーフ駐英ロシヤ公使は、スルニーンに託して急送公文書本国へ送ったというのである。その急送公文書の最後にはスルニーンにふれてつぎのように書かれていた。「……この書簡を品行方正にしてきわめて熟練の人物であるトゥーラの銃器職人スルニーン氏を通じてお送りします。この人物はあらゆる褒賞に値します。氏は、当地ロンドンにて年間二百ギニー余りもの稼ぎが可能であるにもかかわらず、帰国を望んでいるのです……」⁽³¹⁾さらにシクロフスキイの検討した資料には、祖国戦争(露仏戦争)の

勝利のあと、一八一四年に、(レスコフの小説に登場する)ブライトフ將軍がイギリスを訪れて熱烈な歓迎を受けたことが書かれていた。⁽³²⁾

ズイピンの論文との関係では、もうひとつ、歴史家アシュールコフが、トゥーラで出版されたレスコフの『トゥーラのやぶにらみの左利きと鋼鉄の蚤の物語』(一九四八)に書いた巻頭論文をあげておかねばならない。アシュールコフは、この小説がレスコフ自身によって作られたものであることを認めたくえで、左利きの人物像には、レスコフの知りえたさまざまな話を通じて、かつて実在した人物が影をおとして述べて、ズイピン説を説得力のあるものとして詳しく紹介した。アシュールコフはさらに、レスコフが小説に描いたミニチュア細工がトゥーラの伝統として存在していることを語り、一八一〇年のドルゴルーキイ伯爵の回想に書かれた、二丁で重さ十三グラムの拳銃の話、一八三七年のトゥーラの展示会に鉄砲鍛冶のメドヴェーヂェフが出品した八・五グラムの拳銃の話⁽³³⁾を伝えている。

一九二〇年代に『左利き』の舞台化と並んでレスコフの小説を論じ、きわめて示唆的なレスコフ論を展開した

エイヘンバウムについては、文学ジャンルや小説言語の問題を含めて、稿を改めて検討しなければならぬ。ただ『左利き』との関連で言えば、レスコフと同時代のすべての書評者が『左利き』の欠点として指摘していた「不自然なロシア語」を、レスコフに特有の小説言語として初めて積極的に評価したのがエイヘンバウムであったことは、ここで確認しておかねばならない。エイヘンバウムは、一九三一年のアカデミア版レスコフ選集への注のなかで、レスコフの「文学的釈明」を息子アンドレイの回想によって再現しながら、『左利き』の前がきは、『左利き』がレスコフによって書きとめられた本物の民間伝承であることを示す証拠と見なすべきではなく、作品の言語的特色の理由説明と見るべきであると主張している。レスコフが作中で用いた滑稽な言葉の多くはいわゆる「民衆語源」によるものであり、それに加えて「誤った外国語」や「合成語」など、ありとあらゆる滑稽な言語表現がここで用いられていると言っているのである。⁽³⁴⁾

四

レスコフの『左利き』の題材が論じられるとき、ズイ

ピンの論文はおよそ半世紀にわたって、もっとも有力な説として影響を与え続けてきた。トゥーラの鉄砲鍛冶スルニーンという歴史上の人物とレスコフの左利きとのつながりについては、たしかにこれを否定する根拠はなく、両者の個々のエピソードの類似性は、むしろそのつながりの可能性を暗示している。しかしズイピンの主張するフォークロアの語り手（ストロレーツクの年老いた鉄砲鍛冶）の実在については、そのままこれを認めることはできない。『左利き』の前がきに書かれた「伝説の語り手」というのは、リトヴィーン女史やブーフシュタブが正確に指摘しているように、レスコフの小説にしばしば見られる「物語の語り手の役割を担ったひとりの登場人物」なのだ。またズイピン説とレスコフの『左利き』を比較すると、第一に、スルニーンが武器製造技術を学ぶためにイギリスへ派遣されたのに対して、左利きは鋼鉄の蚤をたずさえて、言わば賓客としてイギリスを訪問したこと、第二に、スルニーンがヴォロンツォーフ公使の委託によって急送公文書をロシヤに届けるという外交的使命を果たしたのに対して、左利きは誰の委託にもよらず、ただロシヤを愛する気持から「秘密」を持ち帰り、

しかもロシヤではその思いが無視されて孤独のうちに死んでしまうこと、などの相違点を見出すことができる。われわれとしては、リトヴィーンやブーフシュタブとともに、レスコフの物語の一要素としてのズイピン説の可能性を留保しつつ、さらに『左利き』の題材についての諸説を追って進まねばならない。

これまでに見て来たように、レスコフの『左利き』とフォークロアの関係については、作品の発表時よりほとんどすべての批評家、研究者によって語られており、作者自身も、小説の中でこれを「職人たちの叙事詩」と呼んでいる。『左利き』をレスコフによるフォークロアの再話と見る短絡した解釈は『左利き』の創作史を明らかにするものではないが、ズイピン説の手がかりからみても、レスコフの創作の背景にフォークロアか何かがあった、それが『左利き』の題材や人物の生れる土壌になったという可能性は十分に残されている。

リトヴィーンは、『左利き』とフォークロアとのつながりに新たなメスを入れている。⁽³⁶⁾リトヴィーンは、レスコフが『左利き』の舞台を一八二二年の祖国戦争が終了した時期に設定したのは偶然ではないと述べ、『左利き』

のなかのブライトフ將軍の描き方がフォークロアとのつながりを予想させると言う⁽³⁷⁾。祖国戦争でナポレオン軍を敗退させたロシア軍兵士やコサック兵の思いは、たとえばセミョーノフ連隊の兵士の歌のように、数かずの歌や詩のかたちで広く伝えられており、そうしたフォークロアのほとんどがドン・コサック隊長ブライトフの戦いぶりを称えている。民衆詩や歌謡のなかでブライトフ將軍は勇敢な愛国者として登場しており、その役割は『左利き』⁽³⁸⁾のなかのブライトフ將軍の役割と重なり合うのである。たとえば一八一二年の祖国戦争についてのコサックの物語のなかに、イギリス国王がブライトフ將軍に対してトルコ製の剣を贈ろうとする場面がある。ブライトフはそれに対して、「いや、英国国王陛下、陛下の剣がいかに立派でありましようとも、私には要りませぬ。私たちには私たちの武器職人がおり、彼らはお国の職人よりも腕利きです」と答え、イギリス国王はいかなる金銀や贈物をもつてしても、「母なるロシア」⁽³⁹⁾のみに仕えてきたブライトフの心を買うことはできない。こうした描写はたしかに『左利き』のモチーフとつながり合っている。レスコフがフォークロアの専門家も知らないほどの多く

の民話や伝説を知っていたことは、彼の同時代人によっても証言されており⁽⁴⁰⁾、そのレスコフが、コサック地方だけでなくモスクワ郊外、北方、ウラル、ウクライナなど広範な地域に広まっていた祖国戦争にまつわる歌謡や伝説を知っていた可能性はつよい⁽⁴¹⁾。またこのブライトフ將軍や祖国戦争に関する伝説や歌謡は、レスコフが幼時を過ごしたオリョール地方でも採集されており、レスコフの知人で彼が回想を残したオリョール出身のヤクーシキンが編んだ『ロシア民謡集』(一八六〇。その後一八六五年に増補再刊)、キレーエフスキイの『プイリーナ・歴史歌謡集』第十分冊(一八七二)にもおさめられている。こうしたことから判断して、レスコフがこのフォークロアを知らなかったと考えることは困難である⁽⁴²⁾。

リトヴィーンは、ブライトフ將軍についてのフォークロアのほか、レスコフが左利きのイギリス滞在の描写に用いたであろう資料として、ドン・コサック兵のゼムレヌーヒンが語ったロンドン滞在の話を提出している⁽⁴³⁾。これは、ゼムレヌーヒンがドン・コサック隊長ブライトフ將軍に語った話を、当直中佐クラスノクーツキイが記録したものととして雑誌に発表されている⁽⁴⁴⁾。ナポレオン軍に

対するロシア軍の勝利に際してロンドンへ派遣されたドン・コサックの兵卒ゼムレヌーヒンは当時六〇歳だが、その話は、船がロンドンに着いたその日からゼムレヌーヒンが受けた熱狂的な歓迎ぶりを詳しく伝えている。劇場へ行くと観客が総立ちになってロシア皇帝とゼムレヌーヒンとブライトフ將軍の名を呼び、万歳を叫んだこと。貴族たちがこぞって彼を自宅に招待したこと。国王の招待宴に招かれ、国会では議員たちの出迎えを受けたこと。数千人の見物人の前で乗馬技術を披露したこと。——などが生氣ある言葉で語られている。ゼムレヌーヒンは戦場での技術について語りつつ、自分は無学なので生れながらのやりかたで敵をやっつけるのだと述べており、そこには左利きに似た一面が感じられる。さらに、イギリス人たちが、ゼムレヌーヒンが六〇歳の老人でなく家族持ちでなかったら、イギリス人の妻をめとらせてイギリスに定住させるところだったという話、ゼムレヌーヒンが何としてもロシアの地で死にたいと望んだという話も、左利きの描写によく似ている。ゼムレヌーヒンは、帰国後ただちにドン・コサック隊長ブライトフ將軍のもとへ出頭した。彼はイギリス製の銃をたずさえており、ブラ

イトフ將軍は彼を皇帝アレクサンドル一世とプロシア國王に引き合わせ、さらに多額の褒賞を与えた。⁽⁴⁵⁾

リトヴィーンは、それらの資料を総合して、レスコフの『左利き』の題材と主人公たちは独特の「文学的合金」であり、そこには、すぐれた職人についての言い伝え、鋼鉄の蛋についてのひと口話、ナポレオン軍との戦いの時期についての回想など、さまざまの要素が含まれていると結論づけている。⁽⁴⁶⁾ 穏当なこの結論には問題はなさそうに思われるのだが、たとえばゼムレヌーヒンの物語など、『左利き』との類似性はたしかに興味深く、示唆的であるとはいえ、両者の話の骨組みを比較すれば、そこには「ブライトフ將軍に関わりのある一庶民が賓客としてロンドンを訪れ、どちらも似た反応を示した」という以上の共通項は見当たらない。レスコフがこの物語をどのようにして知ったかという伝達経路についても、かならずしも、納得のいく説明はなされていない。そうした問題点を残しつつ、『左利き』をめぐる問題はブーフシュ⁽⁴⁷⁾タブに受けつがれるのである。

五

ブーフシュタブは、論文のなかで諸説を検討したあと、『左利き』に用いられたひとつの小説を紹介している。

要約すれば、「……ある貴人がイギリス製のピストルを大金で買い、その場に居合わせたトゥーラ武器工場の職工にそれを見せた。職工はピストルを手にとって撃鉄をはずし、ネジの下にある自分の名を見せた……」⁽⁴⁸⁾という内容の小説である。レスコフはこの小説をロンドンでのエピソードに使っている。もちろんこれは小説のなかの一エピソードに過ぎず、『左利き』全体にかかわるものではない。

つぎにブーフシュタブは、『左利き』をめぐるレスコフの「文学的釈明」にたちかえり、そこで何が述べられているかを考察する。レスコフは「文学的釈明」のなかで、『左利き』とフォークロアの関係を全面的に否定しているわけではなく、むしろその逆で、『左利き』の構想が「イギリス人は鋼鉄で蚤を作ったが、わがトゥーラ人たちはこれに蹄鉄をうち、それを送り返した」というひと口話から出発していることを述べているのである。

ブーフシュタブは、このひと口話がはたしてこのままの形で実在したのかという疑問を投げかけている。⁽⁴⁹⁾ もしもこれが実在したのであれば、小説の筋から言って、このひと口話が『左利き』の基本構造のほぼ全体にかかわっていることになる。しかしこのひと口話は、小説の要約としてのみ理解できるのであり、背景の小説無くしてこれが形成されることはない。トゥーラ地方には、古くから「蚤を鎖にしぱりつけた」ということわざがあり、⁽⁵⁰⁾ 前掲のズイビン論文にも「トゥーラ人は蚤に蹄鉄をうち、鎖につけた」ということわざがエピソードに使われている。だがことわざから見る限り、蚤はあくまで生き物なのであって、レスコフがひと口話で語る「鋼鉄の蚤」ではない。⁽⁵¹⁾ ブーフシュタブは、さらに「猿」についてのことわざなども検討したうえで、レスコフの言うひと口話とは、おそらく実在したであろう「トゥーラ人は蚤に蹄鉄をうった」ということわざをもとに、レスコフ自身が自作の小説に合わせて作ったものではないかと推理している。⁽⁵²⁾ 小さなひと口話を対象にして、しかもこのひと口話が民衆語の大家であるレスコフによって語られているとき、その真偽を正確につきとめることはほとんど不可能

に近いが、ことわざの機能を考えると、ブーフシュタプの推理は有効だと言えよう。

ブーフシュタプは、ひと口話を検討したあと、『左利き』の基盤としてことわざ以外にもまだ何かがあったのだと考え、ズイビンヤリトヴィーンの説の可能性を認めつつ、さらに『左利き』の題材をもとめて調査を続けたが、その調査の過程で「偶然」に出会ったものとして、つぎのようなフェリエトンを紹介している。これを見つけたのはサヴィノフという芸術学者だが、彼は自分の研究のために昔の新聞を調べていて、このフェリエトンを発見し、その扱いをブーフシュタプに委ねたのである。これは「B・B・」のイニシャルで一八三四年の『北方の蜜蜂』紙第七十八号に書かれたフェリエトンであり、要約すればつぎのような内容である。

一年ほど前にモスクワ警察の留置所に背の高い赤ひげの男が連れられてきた。酒を飲んでいる様子もなく、法を犯した様子もない。これはイリヤ・ユニーツインという男で、ある日路上でひとりの紳士が彼に会った。ユニーツインは紳士に対して、自分は、一四〇個で一

ゾロトニク(約四・二六グラム)という軽さの、蚤ほど小さな、錠つき錠前を作ることができると自慢した。この男は気違いではないかと疑う紳士に腹をたてたユニーツインは、紳士を自宅へ連れて行こうとしたが、紳士はその無礼さを怒り、男を警察につき出した。警官が男の自宅を捜索したところ、拡大鏡を使わねば見えないほどの小さな錠前がいくつも見つかり、男は釈放された。男はそれのごつごつした手でちっちゃな錠を使って錠前をあけてみせた。この錠前は一八三三年の展示会に出品されたが、ユニーツインは、機械を使わず、ただ両手と普通の工具でこれを作ったのだ。もちろんこんな錠前は不要なものだが、稀有な出来栄で、イギリス人はこれに大金を出す用意があるという。これは自然から学んだこの職人のすぐれた能力を証明するもので、注目に値する。⁽⁵³⁾

これが、錠前と蚤のちがいはあっても、レスコフの『左利き』に通じる要素を持っていることは明らかである。しかし一八三四年という半世紀近く前の新聞に掲載されたフェリエトンをなぜレスコフが知っていたと考え

られるのか。ここでプーフシュタブは、フェリエトンの「B・B・」が、オリョール生れの作家ウラジーミル・ペトローヴィチ・ブルナーシエフ（一八一二—一八八八）のペンネームのひとつであったことをつきとめている。⁽⁵⁴⁾ブルナーシエフは、一八七二年の『ロシア報知』誌に八回にわたって回想記を連載しており、その回想記のなかで、彼が一八三四年当時にロシアの職工、細工師、商人などのうち、とくに珍しい、叩きあげの名人を追うことに夢中だったこと、そして生粋のロシア育ちのさまざまな職人たちについての一連の記事を『北方の蜜蜂』紙に載せたことを書いている。⁽⁵⁵⁾しかもレスコフは同じ時期にこの『ロシア報知』誌に長篇『僧院の人びと』を連載しており、一八七二年の五月号、六月号、七月号については、ブルナーシエフの回想記と『僧院の人びと』は同時掲載になっている。こうした事実から見ても、ロシアの隠れた名人たちに関心を抱き続けてきたレスコフが、ブルナーシエフの回想を手がかりにして、半世紀前の『北方の蜜蜂』紙を調べ直した可能性はきわめて高い。レスコフとブルナーシエフの関係はそれだけにとどまらない。レスコフは（おそらく一八七八年に）『ロシア世

界』紙発行人コマローフの家でブルナーシエフに出会っており、ブルナーシエフの死の直後にレスコフは、彼の手もとに残されたブルナーシエフ自身の回想をもとに、『歴史報知』誌に「ロシア最初のボヘミアン」という論文を書き、ブルナーシエフの生涯をたどっている。⁽⁵⁶⁾『左利き』とブルナーシエフのフェリエトンのつながりはおそらく確実だろう。プーフシュタブは、このフェリエトンとの出会いを「偶然」と呼んでいるが、しかしこれはプーフシュタブの探求心が呼び寄せた偶然とも言えるもので、レスコフの『左利き』の背景にさらにひとつの要素がつけ加えられたのである。

プーフシュタブのあとにもクヂェロフが「レスコフの『左利き』の民衆詩的源泉の問題によせて」という論文を書き、もう一度この問題を検討し直し、レスコフの個人蔵書にもあるアフナーシエフの『ロシア伝説集』を『左利き』の題材のひとつとして説明している。⁽⁵⁷⁾このように『左利き』の題材をめぐる探求はなおも続けられているのだが、それ以外にも『左利き』のテキストをどう扱うかという問題が今なお残されている。いささかミステリーじみた話だが、著作集版（一八八九）で作者によ

って削除された『左利き』の前がきが、じつはレスコフの死の前年に刊行されたスタシレーヴィチ版の単行本『トゥーラのやぶにらみの左利きと鋼鉄の蚤の話』(一八九四)では、ふたたびテキストに復活しているのである。これを作者レスコフによる前がきの復活と判断するのは、ブーフシュタブの調査結果⁽⁵⁵⁾から見ても、レスコフの晩年の発言⁽⁶⁰⁾から見ても難しいかも知れない。しかし『左利き』の前がきが削除された経緯をすでに知っているわれわれとしては、前がきの削除を作者の最終意志として受け入れ、それで問題を解決済みとしてしまっただけであらうか。それよりも、作者の本来の構想を考えて前がきを復活させ、これを小説のコンテキストのなかで読みとる方をこそ選択すべきではないだろうか。こうした問題を孕みつつ、『左利き』の旅はまだ終わっていないのである。

(1) В. П. Филиппина, Ю. Е. Прохоров. Русские поговорки, поговорки и крылатые выражения. М., 1979, стр. 153.

(2) 国立文芸出版所版レスコフ著作集第七巻ほか、この版の注で『ルーシ』を雑誌と書かれてらるが、これは新聞である。のちに月二回発行になった。

(3) См. Библиографический словарь, Писатели орловского края. Орел, 1981, стр. 109—113.

(4) 拙稿「レスコフ文献考」(『言語文化』十八巻、一九八二)を参照。

(5) А. Волынский. Н. С. Лесков. СПб., 1898.

(6) М. Горький. Н. С. Лесков. — В кн.: М. Горький. Собр. соч. в 30—ти томах, Т. 24. М., 1953, стр. 228—234. 但し初出はスルリン版レスコフ選集(一九二二)、『世界文学大系30』(筑摩書房、一九六九)に福岡星見氏による邦訳がある。

(7) См. ст. Б. С. Ромашова: Московский художественный театр второй и современность. — В кн.: Московский Художественный Театр Второй. М., 1925, стр. 16—64.

(8) Л. Аннинский. Лесковское ожерелье, М., 1982, стр. 146—147.

(9) 「ナローエノホ・グリヤーン」については中村喜和氏「キスタワの縁日」(『なろうと』一、一九七九)、坂内徳明氏「ネツマ川氷上のツリヤーン」(『出版ハイウェイ』一九八三・一・一)の二々の記述がある。

(10) Евр. Замятин. Народный театр. — В кн.: Блоха (Сборник статей), Л., 1927, стр. 3—11.

(11) В. Эйхенбаум. Лесков и литературное народничество. — В кн.: Блоха, стр. 12—15.

- (21) Л. Аннинский. Лесковское ожерелье, стр. 148.
- (22) Собр. соч. Н. С. Лескова в 11—ти томах, Т. 7, М., 1958, стр. 499.
- (23) Собр. соч. Н. С. Лескова в 11—ти томах, Т. 11, стр. 252.
- (24) Собр. соч. Н. С. Лескова в 11—ти томах, Т. 7, стр. 498—499.
- (25) 『新世』の雑誌について、全十一巻のその著作集第七巻の社説を引く(後添) 244号。
- (26) Н. С. Лесков. О русском левше (Литературное объяснение). — В кн.: Собр. соч. Н. С. Лескова, Т. 11, стр. 219—220.
- (27) Новые книги. — Дело, 1882, № 6, стр. 257—259.
- (28) Новые книги. — Отечественные записки, 1882, № 6, стр. 257—259.
- (29) Библиографический листок. — Вестник Европы, 1882, № 7, задняя обложка.
- (30) Новые книги. — Устой, 1882, № 7, стр. 60—61.
- (31) Н. С. Лесков. Старинные психопаты. — Собр. соч. Н. С. Лескова, Т. 7, стр. 448—491.
- (32) Н. С. Лесков. Об Иродовой темнице. Письмо в редакцию. — Собр. соч. Н. С. Лескова, Т. 11, стр. 242—243.
- (33) И. А. Шляпкин. К биографии Н. С. Лескова. — Русская старина, 1895, № 12, стр. 205—215.
- (34) Там же, стр. 211.
- (35) С. А. Зыбин. Происхождение оружейничьей легенды о Тульском косом Левше и стальной блохе. — Оружейный сборник, 1905, Отдел 2, стр. 1—58.
- (36) 『新世』の雑誌に未見であり、『新世』の雑誌に關する個所は全十一巻のその著作集第七巻の社説を引く(後添) 244号。
- (37) Б. Я. Бухштаб. Литературоведческие исследования. М., 1982, стр. 77.
- (38) 『新世』の雑誌に未見であり、『新世』の雑誌に關する個所は全十一巻のその著作集第七巻の社説を引く(後添) 244号。
- (39) В. Шкловский. Об одной цеховой легенде. — Огонек, 1947, № 19, Май, стр. 16.
- (40) П. Сариньин. Ежедневные записки в Лондоне. СПб., 1817. 頁 33. Гаммель. Описание Тульского оружейного завода в историческом и техническом отношении. М., 1826.
- (41) В. Шкловский. Об одной цеховой легенде. — Огонек, № 19, Май, 1947, стр. 16.
- (42) 『新世』の雑誌に未見であり、『新世』の雑誌に關する個所は全十一巻のその著作集第七巻の社説を引く(後添) 244号。

編する。

- (33) В. Ашурков. Вступительная статья (без названия).
——Н. С. Лесков. Сказ о Тульском косом Левше и о стальной блохе. Тула, 1948, стр. 3—15.
- (34) Н. С. Лесков. Избранные сочинения. М.—Л., 1931, стр. 753—757.
- また、本書は版の上からななべ一九二〇年製のタイプマシーンを以て『左利き』の「誰か」の挿話の「誰か」の挿話を検閲したものである。
- (35) 本書の注(32) 443(47)を参照。
- (36) Э. С. Литвин. Фольклорные источники “Сказа о тульском косом Левше и о стальной блохе” Н. С. Лескова. —Русский фольклор, 1956, Т. 1, стр. 125—134.
- (37) Там же, стр. 128.
- (38) Там же, стр. 128—130.
- (39) Там же, стр. 129.
- (40) Ф. Де-ла-Варг. Литературный кружок 90—х годов. —Известия Общества славянской культуры, 1913, Т. 2, Кн. первая, стр. 19.
- (41) Э. С. Литвин, стр. 131.
- (42) Там же, стр. 132.
- (43) Там же, стр. 132—134.
- (44) Рассказ казака Александра Земленухина графу

Матвею Ивановичу Платову, записанный дежурным

- подполковником Краснокутским. —Русский вестник, 1814, кн. 1: Перепечатано в журнале “Русская старина”, 1905, Март, стр. 712—717.
- (42) 『ロシアの昔(マーク・カクタナー)』増補版。
- (43) Э. С. Литвин, стр. 134.
- (44) В. Я. Бухштаб. Об источниках “Левши” Лескова. —Его же, Литературоведческие исследования. М., 1982, стр. 72—101. この論文の増補版『Русская литература, № 1, 1964, стр. 49—64, 223』新版では多少の加筆修正がある。
- (45) Там же, стр. 80.
- (46) Там же, стр. 82.
- (47) Там же, стр. 83.
- (48) Там же, стр. 86. ホーランド人「誰か」のロマンチックなキエフの歴史を以て「誰か」の挿話を補った。
- (49) В. Я. Бухштаб, стр. 86.
- (50) Там же, стр. 92—94. ホーランド人の著書には全文が挿話の挿話である。
- (51) Там же, стр. 96—97.

- (45) В. П. Бурышев. Вспоминания об эпизодах из моей частной и служебной деятельности 1834—1850. —Русский вестник, 1872, № 5, стр. 48.
- (46) Н. С. Лесков. Первенцу богеми в России. — Исторический вестник, 1888, № 6, 534—564.
- (47) А. П. Кудяков. К вопросу о народно-поэтических истоках "Левши" Н. С. Лескова. — Вопросы истории и теории литературы, Вып. 4, Челябинск, 1968, стр. 102—112.

- 但しリトヴィーンやブーフシュタプの説を否定するタチ
ヒロンの見解は余りにも一面的で説得力はない。
- (88) Л. Аннинский. Лесковское ожерелье, стр. 141.
- (89) Собр. соч. Н. С. Лескова, Т. 7, стр. 499.
- (90) 本稿の注(22)および(23)を参照。
- 付記 『左利き』の邦訳は、清水邦生氏訳『各工左きき』
(講談社 少年少女世界文学全集31(一九六〇))と安藤
厚氏訳『左利き』(『NABAE』5(一九八一))のふた
つがある。

(一橋大学講師)